



○ 第7回 ROTARY
2003年9月25日・26日

会議

新しい時代の扉を開ける

第7回 日韓親善会議開催

朋有り、遠方より来たる
また楽しからずや

9年ぶりに再開した、日韓親善会議では、旧交を温める姿が、あちらこちらで見られました。

9月25日、開会式の開かれる会場に入ると、まず、その人の多さに驚かされました。会議は、東京ディズニーリゾート内にある東京ベイホテル東急で開催されましたが、ポロシャツ、ジーンズ、スニーカーといった服装でディズニーランド目当てにやってくる人たちの多いこのエリアで、スーツ姿の中老年の団は、ちょっと不思議な光景に映ったかもしれません。

日本語と韓国語で進められた会議

すべての会議が韓国語と日本語で進められたこと。このことが、日本語のみで進行されていた前回までの日韓親善会議と大きく変わった点です。友愛の広場や懇親夕食会の席上では、古くから顔なじみの韓国と日本のロータリアンが日本語で再会を喜び合う傍らで、英語であいさつを交わす若いメンバーの姿がありました。日韓ロータリアンの新しい関係を予感させる場面です。

開会式は、日韓親善会議委員会連絡幹事の黒田正宏パストガバナー（PG）の司会で進められました。また、通訳は、米山奨学生の金美英さん、具京姫さん、金恩子さんが務めました。

日韓親善委員会委員長（日本側）の丸山宏PGは、あいさつのなかで、韓国・慶州で開催された、第6回会議の思い出を語りました。また、第1回から6回まで

の経過を報告しました。今回の会議については、「この会議を盛り上げようという熱烈な意志をひしひしと感じることができ、これだけ多くの方々が出席され感激でいっぱいです。両国の関係が、ますます発展していくことを心から祈りたいと思います」と述べました。

韓日親善会議委員長（韓国側）の蔡熙秉PGは、「韓国と日本は、向笠廣次元国際ロータリー会長のおっしゃった通り、世界の兄弟姉妹の中でも、最も近い国に住んでいる同士であります。両国で、友情をもって架けた橋は、全世界を通して平和を築く友情の礎としたものです。日韓両国のロータリークラブは、約220の姉妹関係を結び、韓国の場合、対外国姉妹締結の約60%が日本とのものです。これからも引き続き、この関係を維持、発展させるために、より多い青少年交換を通して、グローバル時代の民主主義の意義と価値を学び、国際性豊かな次の世代の指導者を育てるためにも、インターアクト、ローターアクト、奨学生などで、新しい親善の道を切り開く努力が必要だと思います」と話しました。

そして、これまでに開催された日韓・韓日親善会議に対して大きな貢献のあった菅野多利雄PGと呉在璟PGに感謝の盾を贈呈して、開会式は終了しました。

懇親夕食会は、音楽大学の学長である第3650地区李秉斗PGがピアノの弾き語りなど、ロータリーファミリー手づくりのアトラクションを楽しむことができました。終始、なごやかな歓談が続き、最後は日本のロータリーのしきたりに従って、「手に手つないで」を歌って閉会しました。

スポーツは、国境を超えて人々の交流を促進

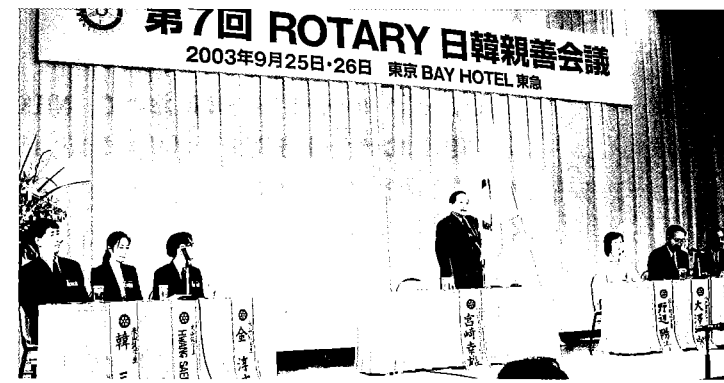
第2日は、どのようにして両国のクラブやロータリアンが関係を築いてきたのか、また、これからはどのような関係に発展させればよいのか、というテーマについて、具体的な議論が行われました。

姉妹・友好交流の現況報告では、第2520地区・塩釜RCの桑原茂氏が、姉妹地区について、「インターアクトの翼という名前で、インターアクトの短期交換を行いました。互いの活動報告や意見交換をし、また、ホームステイをして文化や習慣の違いを勉強しました。青少年のスポーツ交流では、韓国から小学生のバドミントンの選手を招き、交流をしました。このときもホームステイをしています。スポーツは、国境を超えて、人々の交流を促進する役割を果たします。日韓両国は、綿密な協力の下に、2002年、ワールドカップ大会を成功に導くことができました。世界中の誰もが、日韓両国の完璧な準備に驚き、両国はさらに近くて親密な国になったと思います」と述べました。

姉妹クラブについて、韓国・第3660地区釜山東南RCの権赫允氏は、「お互いのクラブで、お互いの言語を習ってみようということになり、例会のときに勉強するようになりました。言葉の壁を乗り越えたら、次は共同事業です。仲がいいというのはよくあることですが、共同事業をするというのがロータリー。これによって、お互いがさらに親しくなりました」と報告しました。

両国は長い間友人であったことを思い出したい

ロータリー平和センター所長の最上敏樹教授は、「和解と平和」と題する記念講話の中で、最近の世界情勢について、「報復は新たな報復を生みます。こういう報復の連鎖を止めなければいけない。憎しみの連鎖を止めなければならない。あなたが気に入りません。ですから、あなたを殲滅すると言っていたのでは平和は来ない。相手にとって平和が来ないだけではなくて、自分にとって



多くの感銘と示唆を与えたフォーラム

日韓（韓日）親善会議一覧

第1回	1982年4月27～29日	韓国・ソウル
第2回	1983年4月20～21日	日本・神戸
第3回	1985年4月24～26日	韓国・ソウル
第4回	1987年3月28～29日	日本・宮崎
第5回	1992年2月25～26日	日本・仙台
第6回	1994年10月18～19日	韓国・慶州
第7回	2003年9月25～26日	日本・浦安

も、平和は永久に来ません。あなたを愛しています、とは言いにくいのですが、あなたを我慢しますということくらいは言えるはず。あなたを我慢しますと言わなければ、平和は得られないと思います」と述べました。

また、日本と韓国の両国について、「今なお、時折、ぎくしゃくした関係が生ずることも事実です。しかし、両国は、ときにはいがみ合いをしながら、長い間、良き友人であったということも思い出したいと思います。かつて、よき友人であった経験があるのなら、必ずやり直すことができると思います。それが、既にたくさんの人間の間では出来上がっていますし、それを育てていくほかない。それが最も幸せなことだと、一人の日本人として思います」と述べました。この講演は、特に韓国のロータリアンに好評で、講演のあと、韓国のロータリアンたちは最上教授を囲み、意見交換をしたり、韓国へ招待をしたりしていました。

午後のフォーラムでは、「聞こえますか 日韓新世代の交流」というテーマで、日本からはロータリアン2人とロータリー財団学友が、韓国からは、20代、30代、40代を代表して一人ずつの米山記念奨学生が意見を述べました。

先入観を捨てろ

Hwang Saemeeさんは、創氏改名の話に触れました。彼女のお父さんは、日本の名前がついています。お父さんが生まれた時代には、強制的に日本の名前がつけられ、お父さんは日本のことを好意的には思っていないのですが、彼女が日本に留学するときに、「先入観を捨てろ」と話したそうです。この話は、日韓両国、会場にいたすべての人々の心を打つものがありました。

日韓両国のロータリアンが一堂に会し、お互いに意見交換をしたこと、このことこそが、お互いの先入観を捨てて親密な関係をつくるための願ってもない機会になったことと思います。両国のロータリアンが、再会と友好関係の発展を願いつつ、今回の親善会議が終了しました。

取材『友』編集長 二神 典子